

石坂洋次郎著

ある地方の
町の人の
物語

英集
社刊

金の糸・銀の糸

金の糸・銀の糸

昭和三十九年七月十五日 初版発行
昭和四十年七月二十日 再版発行

定価 三五〇円

著者 石坂洋次郎

発行者 陶山巖

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三
振替 東京 一五六五三
印刷 大文堂印刷

乱丁・落丁本はお取替いたします。

金の糸・銀の糸

——ある地方の町の人々の物語——

装帧
芹沢銈介

日曜日だった。

桜が過ぎて六月に入ると、雪深い北国のK市にも、晴れた日には、初夏らしい空の色がみられる。屋敷町の垣根や庭の樹々の緑も、日ましに色を濃くしていく。

一步郊外に出ると、ひろびろとした緑の水田や、その間を大きくうねって流れる青い色の大川や、もう雪が消えたいまはまだ灰色の国境いの、山々が重なり合って伸びているのが見晴らされる。

市の中央には昔の城跡の公園がある。松の古木と桜並木、それらの影をうつす外濠や内濠、古めかしい頑丈ないくつかの城門、本丸の端やそのほか要所にそびえている四つほどの白壁のお角櫓。五月末の桜の季節には近郷近在から、おびたしい見物人が集まってくるが、それすぎ去ると、ひっそりとして、商店街がゴテゴテした

都会風に変っていくのに、ここだけは、何十年来、変らない静寂ないこの場所を市民達に提供している。

K市はこの城跡の公園を中心に上町と下町とから出来ている。公園の東北にあたるむかしの士族屋敷のあとの住宅街には、厚いヒバの垣根をめぐらし、ひろい屋敷内に花や果樹を植えた、屋根の低い家々が並んでいる。マゲを結い、カミシモを着て、大小の刀を差した、ここの家の主人たちが、毎日、お城のそれぞれの詰所に出かけていった有様が目に浮ぶような気がする。

老人達の話では、武士は身分こそ高いが、町のお金持な商人達よりも、はるかに貧しい暮しをしていたもので、例を云えば、本物は質に入れてなかみは竹の刀——いわゆる竹光をさして登城している侍たちもほんとに存在したものだという。

しかし、ともかく、十万石の城下町であっただけに、住民の気質にも、単に利欲だけでは動かない、かたくななものが、まだいくらかは残っている。間もなくしだいにそれもうすれて、こざかしくて深味のない市民気質が出来上っていくことであろう。これは日本全国の市町村がそういう傾向にあるのだから、K市の人々だけを責め

るわけにはいかない。

日曜日のせいか、静かな屋敷町の往来で、子供達が、いろんな遊戯をして遊んでいた。その叫び声や笑い声が、いつもは忘れ果てられたように閑寂な屋敷町に、明るい活気を添えていた。

ヒバの厚い垣根をめぐらした家々の一つに「士族 柿崎平馬」という古びた門札をかかげた家があった。ほんとは、平馬というのは先代の名前であるが、大銀行の支店の次席をしている当主の良太郎は、至って無頓着なたちで、新しい表札も出さず、父親のものをそのままかけているのである。地方の都市では、長く住みついている人々が多いので、郵便や荷物は、その表札でまちがいにしに配達される。

たまたま、柿崎家の前を通る子供が表札に目をやつて尋ねたりする。

「士族ってなあに——？」

「むかし刀をさして威張って歩いていたサムライのことだよ」

「サムライってえらいんだろ？」

「ああ、昔、あんまり威張ったせいで、いまはたいてい

貧乏しているよ。いまだき『士族』なんていう肩書きを出しているのは、ここの家は貧乏ですと名乗っているようなものだよ」

そんな親子づれの会話が往来から聞こえて来て、柿崎家の人々を苦笑させることもある。

「お父さんの名前を記した新しい陶器の表札ととりかえなさいよ」

「ほんと。家だけよ。『士族』を名乗った古めかしい表札を出しているのは……」

二人の娘達は、ときどきそれを云うが、父親の良太郎は笑ってとり合わない。

「わしはいらん。お母さんの名前の表札を出せよ。『元 P・T・A 副会長・柿崎たまえ』と書いてね」

「いやですよ、貴方。それでなくても、あそこの家は奥さん天下だというデマがとんでいるんだそうですから……」

「デマでもないだろう。火のない所に煙は立たないといふからな」

「娘たちの前で……およしなさいよ、貴方……」

「いや、娘達はずつと生活を共にしているんだから、

うちが奥さん天下かどうか、いちばんたしかな証人だよ。……お前達、どう思う？」

「たしかにその傾向があるわねえ」

「賛成。……でも、お母さん。私達はそういう家風に反対しているわけではないのよ。姉さんも私も、将来うちよりかもう少し度の強い奥さん天下の家庭をつくりたいと思ってるのよ。……それが家庭の在り方として、いちばん温かくて健全なんじゃないかしら……」

「そうよ。ご近所の木村さんの家、ご主人が毎晩のように酔っぱらって帰って来ては、大声で家中の者を怒鳴りつける。奥さんはぶたれたり蹴られたり。可哀そうに中学や小学の子供たちはブルブル慄えているわ。運がよく、山林地主だったので、財産はたくさんあるんでしょうけど、あんな暗い家庭生活では、奥さんも子供達もお気の毒だわ……お母さん、もう少しのさばっても大丈夫よ。これで、私達にもう少しお小遣いをくれると申し分ないんだけど……」

「おふざけでないよ。親をつかまえて、上げたり下げたり……。そんな料簡でいるなら、お小遣いも減俸しますよ、三分の一ぐらいに……」

「それならそれでもいいわ。姉さんも私も、ロクな化粧品やアクセサリーも買えず、野暮ったい格好をしてどこからもお嫁のもらい手が来ず、私達、二人ともオールドミスになって、この家に、家ダニのようにしがみついていますからね……」

「まっ！ どうでしょう、お父さん！……貴方があんまり甘やかすからですよ。何とか云ってやって下さいよ」

「私は感心しながら聞いていたよ。いつの間にか、二人とも、お前と太刀うち出来るぐらいに生長したと思つて……。しかもそのやり方が、私をやつつける、ある時のお前のそれにそっくりなんで、私は楽しくなっちゃったよ。……娘たちはいいい母親をもつて仕合せだよ」

「まあ、貴方までが……。親子そうがかりで私を攻めるのね……」

「テキはビクともしないさ。よせ来るやからをちぎっては投げ、ちぎっては投げ……」

そこで、みんな笑い崩れてしまった。茶の間の中央の丸いテーブルの上には、煎餅やコーヒーの残骸が散らばっている。

——ここで柿崎家の人々を一応紹介しておこう。主人

の良太郎は、私大の経済科を卒業してから、郷里のK市の東京に本店がある大銀行の支店に勤務し、県内の支店に三、四度転動したあと、鰥夫^{かふ}となっていた父親の「士族 柿崎平馬」が老衰したので、再三、いい条件の転勤の話がもちこまれたにも関わらず、それを断わって、K市の支店に居すわってしまった。

長身で、面長な整った顔立ちをしているが、優しそうな色白の風貌の中にも、それこそ土族の血すじを思わせるピリツとした閃めきがあり、口数は少くおだやかな調子だが、要領はピタリと押えている。ガラガラしない、ものの静かだが、人を犯さず、人に犯されない、ゆったりした風格を備えている。

したがって、本店の重役達の受けもよく、いろんな行きがかり上、次席の地位にいるが、月給は支店長よりも多い。第一、支店長自身が、良太郎の二、三年後輩にあたっており、良太郎の人柄に一目おいていたので、地位と月給の不合理な点について、いささかの不平も抱いていない。——そういう控え目な生き方をして来た良太郎だが、ここ一、二年のうちには、ほんとの支店長になれ

る見込みだ。

良太郎は、今年五十四歳で、戦争中は主計中尉として、二年間大陸に従軍したが、無事に帰還して、敵が戦略的価値がないとみたのか、一回も爆撃を受けず、街がそのままだに残ったK市の、明治風の赤煉瓦づくりの銀行に、また勤めだったのであった。

趣味は、休日など、ひろい屋敷に野菜をつくったり、花を植えたり、果樹を栽培したり、犬、猫、小鳥などを飼うことだった。麻雀、碁将棋など、勝ち負けで楽しむ遊びごとには、いっさい手を出さなかった。例外は、相撲のテレビファンであること。しかし、それだって、土曜日か日曜日でなければ見るひまがない……。

主婦のたまえは四十九歳。良太郎の長身に較べて、だいたい背が低いが肉づきがよく色白で、目鼻立ちのハッキリした顔立ちなので、夫婦つれだって歩いても、少しも見劣りがしない。口はにぎやかな方だが、頭の回転がよいので、相手を傷つけるようなことはしない。生家は、近くの町の古いつくり酒屋の長女だが、東京の女子大学を出て間もなく、良太郎と見合い結婚をしたのである。

民子と加奈子と年子の二人の女の子（民子は二十三、

加奈子は二十二が、年ごろになると、両親の見合い期間の交際について、うるさく尋ねたが、良太郎は、

「昔のことで忘れたよ。母さんに聞けよ」

と云うし、たまえはたまえで、

「普通と変ったことはありませんよ。お天気の話をしたり、映画の話をしたり、一緒に食事をしたり……。そんなことで三カ月ばかりつき合ってから、私、仲人にO・Kしたのよ、お父さんが無口だったのは、いまと同じことだけど、なんとなく一生を託するに足る人だという感じがしたの……」

「お父さんの見合い結婚というのは分るけど、お母さんのように積極的な気質の人が、恋愛結婚をしなかったのは、どうも腑に落ちないな。何か信念があったの？」

「失恋でもしたのかな？」

母親の気質を呑みこんでいる姉妹は、通り一べんの説明ではなかなか満足しない。自分達の将来の大切な参考にもなることなので、それから——？ それから——？ と、代る代る追究する。

「——お父さまもご承知のことだし、お話しますが、私、東京で女子大学に通ってる時、ボーイ・フレンドみ

たいものが出来たの。その男は、ハンサムだし、痒い所に手がとどくように親切だったし、私、ボウとお熱を上げてしまったの。その男がウインクすれば、私はどこへでもついて行つたろうし、何でも与えてしまつたろうと思うわ。ところが、おたがい愛情を告白しようという気持ちになりかけていたある日、朝の新聞を開くと、その男は女たらしで、欺した一人の女に短刀で刺され、それが動機で身辺を調査すると、自分が通っていた大学の会計室に忍びこんで、授業料の大金を盗んでいたことまで判明したの。——私は直接、身体を汚さねはしなかったけど、男をみる目がないことでは盲目同然な自分を反省させられて、何べんも死のうかと思つたわ。だからといって、私は、お前達に恋愛否定論を強制しているわけではないの。……ただ、男でも女でも、口前や肌ざわりなど、調子のよすぎる人間には、気を注げなさいよと云つてるだけ……」

「お父さん、その話知つてたの？」

「交際期間中に、私が話しましたもの」

「お父さんは——？」

「(良業ハロニ苦シ)お前はいい経験をしたよ、と仰有つ

たぎり……」

「もし、その時、お母さんがその男と深いつき合いをしていたら——」

「加奈ちゃん。そんなこと尋ねるものではないわ」と、民子は妹をたしなめた。

「構いませんよ。……もし、そういう関係になっていたら、私は、一人の男にたよらず、なんとかして自分の力で生きる道をきりひらいて行つたでしょうよ。俗に云う、身体を張った生き方ね。だったら、いまごろ私は、美容師かデザイナー、あるいは飲屋のマダムにでもなっていたかも知れないわ……。それが、お父さんのようないい方にめぐり合つて、お前達のような娘を生んで、私はほんとうに仕合せだつたと思つていますわ」

「ねえ、親戚の伯母さんや従姉妹たちが、お母さんとお父さんのお見合いについて、だいぶ変つた話をしてるんだけど、あれ、ほんと——？」

「伝説よ。……私、男の問題で、そういうショックを受けたあとだし、はじめは投げやりな気持で、お父さんとお見合ひしたことはほんとよ。わるい心の男でさえなきやあ、大酒飲みでさえなけりやあ、多少ボンヤリした人

間でも仕方がないっていう気持……。そして、はじめの間はお父さんを、見かけは品がいいけど、ボンヤリした人だぐらいに思つてたわ……」

「伯母さん達の伝説ではね……」

「加奈ちゃん、およしなさいよ。お母さんに恥をかせるものじゃないわ」と、姉の民子が、また、何でもペラペラ云う加奈子をたしなめた。

「いいのよ、いいのよ。加奈子に云わせてごらんさい」

「伝説第一章ではね、はじめのお見合ひは、公園のお濠に臨んだ料亭で二人ぎりで食事をしたんですって……。一時間ばかりいる間、二人とも一言も喋らなかつたんだって……。それでいて、ママにもパパにも、窮屈な気持が少しもなく、池に面した室に二人ぎりであるのが、落ちついてしっくりした、いい気分だつた。……そのうち、とつぜんパパが『貴女は女に生れたことを後悔することがありますか？』と尋ねたんだって……。」

『いいえ、ございません。貴方は男に生れたことを後悔なさつたことがございますか？』

『いえ、ありません』

禪問答めいたそれだけの会話が あったぎり。しかも料亭の勘定はママがはらったんだって……。いまの話、ほんと、ママ？」

「さあ、禪問答めいた会話のことは忘れたけど、勘定をはらったのは私だったということだけは覚えていますよ。……パパがケチなんじゃなくて、気がつかない、ゆっくりにした人柄なんだということは、あとでしぜんに分つて来ましたけど……」

「じゃあ、途中をはぶいて、伝説の終章に入るわ。……それからしばらく経って、二人はやはり、はじめて会った、お濠端の料亭の座敷で、食事をしたんですと。相変らず二人とも口数が少い。そうこうするうち、ママが膳の上の里芋の煮つけを、お箸につき刺してペロペロなめてから『貴方、これを召し上りますか？』と、パパの方に差しのべたんですって。すると、パパは箸ごとママのしゃぶった里芋を口に入れて、ムシャムシャ食べてから、

『ほく、こんな甘い物を食べたことがありません！』と感激して答えたんだって……。すると、ママはワッと泣き出して、

『私を貴方のお嫁さんにして下さい！』と訴えたんですって。……私、率直で、庶民的で、少しばかり品がわるくて、とてもいいお話だと思うんだけど……。この伝説、ほんと、ママ？」

「伝説にウソもほんともあるもんですか。伯母さん達がそう思っていれば、それはそれで真実のことになるのよ。……そうねえ、平面的に事実だとは云わないけど、どこか真実の匂いがしないでもないわ。……お前達のお父さんって、いい人だわ」

「善きタネが善き畑にまかれて、善き作物が育ったのね、わが家では——」

両親と、こんな調子で会話する姉の民子は土地の短期大学を卒業して、栄養士になりたい志望である。身体つきは父親に似てスラリとしており、皮膚のつやや顔立ちが母親に似て、整って魅力がある。一つ年下の加奈子も、よくまちがえられるぐらい、風貌は姉に似ているが、民子が父親の良太郎のおだやかな気性を多く受け継いでいるとすれば、加奈子の方は、積極的な母親のたまえの方の気質をよけい受け継いでいる。それが姉妹の関係をかえってスムーズにさせているようだ。同じ気質だった

ら、ぶつかって火花を散らすことがしょっちゅうだろう。そういう加奈子は、高校きりで学校をやめ、いろんな講習会などで、将来、主婦として必要な技術を身につけていた。学校なんて、形式だけのもの——という腹なのだ。

ただ、姉妹の不満とする所は、二人が、一つちがいの年子であるということだ。洋服だって、髪形だって、少しづつ変えるように気を配らなければならないし、男の友達だって、民子と加奈子は、内々でお目あてを別にしてつき合わねばならない。

家庭が堅実で、二人とも頭の出来がよく、顔立ちも十人並みなので、しぜんに交際を求める男性も多い。それらの相手と、恋愛や結婚という考えをヌキにしてつき合っていればいいようなものだが、若い娘の場合、なかなかそうはいかない。若い男達が、姉妹の中のどちらがお目あてなのか、ブラカードでもかかけて近づいて来てくれるといいのだが……。

中には、鉤を下していれば、どちらかがパクツと食いつくだろうという、無責任な野心で二人と交わっている男もないとは云えない……。

母親のたまえは、娘たちが異性につき合うことでは、わりあいに寛大だった。その方が娘たち自身に責任を感じさせることになって、かえって安全だと思っている。殊に、自分の未婚時代の危い失敗を語って聞かせてあるし、民子も加奈子も、見かけがよく、口前は滑かだが、誠実さに欠けた男に欺されるようなことは、万あるまいと信じていた。

ともかく、柿崎家には、四、五人の若い男達が、ときどき出入りしていた。医大のインターンもあれば、大学を出た勤人もあり、若い会社員もある。

「ねえ、姉さん」と、加奈子がときどき訴えかける。

「父も母もいい人なんだけど、私達を年子に生んだということは一つの失敗ね」

「私はそうも思わないけど……」

「失敗だわ。年が三つ四つちがっていけば、洋服だって姉さんのおさがりを私が着られたらうし、私の方でも、ハッキリ姉さんという考え方で、貴女をあがめ奉ることが出来たらうし、男の人達が遊びに来て、姉さんがおめあてのお客さんだということが分るし……。いつそ私達、双生児に生れた方がよかったと思うわ」

2

「加奈ちゃんと双生児——？ それもわるくないわね。

私、なんだかんだと云うけど、加奈ちゃんを好きなんだから……。そうねえ、双生児に生れて、流行歌手として売り出せばよかったかも知れないわね……」

「そうよ。お姉さんがアルトで私がメツソプラノで

……きっと成功したろうと思うわ」

姉妹は半分は苦い味の微笑を浮かべて、そんな話をしたりする。

柿崎家には、いまのところ、平和な日々が訪れているが、ときどき、みんなの気がかりになる問題が一つあった。それは、姉の民子に婿をとって家を継がせるか、それとも、姉妹二人とも嫁づけてしまおうかということである。

婿をとる場合のことを考えると、家屋敷はあるし、良太郎とたまえが、老後、口を過せる分の準備は出来ているし、婿の収入におんぶしなければならぬという心配はまったくくない。しかし、若夫婦としては——娘達ともかくも、男の方では、妻の両親と同居するのは窮屈だろうし、二人ぎり自由な新婚生活を楽しみたいにちがいない。また、娘達としても、婿を迎えて両親と同居するとなると、双方の間に立たされて、目にみえない心づかいをいろいろさせられるにちがいない。

それでよくても、近ごろの若い連中は、自由な暮らしを求めているようだし、出来れば、相手方も、両親と同じ居しなくてもいい次、三男坊を選んで嫁にやりたいと思う。

「……でも、ねえ、お父さん。私等が年をとって、頭が古くなりすぎたせいかも知れないけど、私のいまの心境では、若い同士が新世帯をもって誰はばかりず、気ままに暮すのは、本人達のためにも、いいことばかりではないような気がするんですよ。少しは遠慮するものがあった方が、二人の生活を健全なものにすると思うんだけど……。私は、貴方のお父さまの世話を少しばかりでもしてあげたわ。お父さまが同じ家にいらっしやるのが、私達が若さの勢いで、愛欲の生活に耽溺するのを防ぐブレーキの役目をしていくれたと思うのよ。若い者が二人ぎり、そういう思いのままの生活に溺れていると、しらずしらずに、おたがいの気持がすさんでくるんじゃないのかしら……」

たまえは、二人ぎりの時、良太郎にそういう相談をもちかけたりする。

「それは同感だ。しかしだな、たまえ。もっと人間らし

いやり方は、シュウトやシュウトメがいなくても、若い二人が、飲みすぎ食べすぎは、胃腸をそこねるもどという自覚をもって、夫婦としてエチケットのある暮らしを立てられたら、これにまさったことはないと思うね」

「そりゃあたしかに、人間として、よりよい生き方だと思わ。でも、若さの盲目的な勢いをセーヴすることは、生やさしいことじゃないと思うの。私だって、貴方のお父さまがいらっしやらなかったら、ある日、ある時は、貴方に抱きついて、家じゅう転げまわって、若い肉体の歓びに浸ったりしていたと思うの。その結果は、早々にアクビが出る倦怠感に襲われ、おたがいに對するそこはかない敬愛の念もすり減らされて、マンネリズムに陥った日々の暮しが、惰性でつづけられていくようになったらうと思うの……」

「でもなあ、たまえ。そんなことは口先きで娘達に教えられるものではなし、結局は、本人達を信頼して、好きにやうにさせていくより仕方がないことだ。……それよりもお前は、民子なり加奈子なりに、婿をもらって、家を継がせたいと思ってるのかね。どうなんだ……」

「そう思ってるわ。なぜって、年の順でいけば、貴方は

私より先きに死ぬでしょう。そういう場合は、私が貴方の世話をしあげられるけど、私が先きに死ぬことだったり得ないことではないし、そうなると、貴方はひとりぼっちになってしまう。そして、男の年寄りの一人ぼっちほど、惨めな存在はありませんからね。どうしても実の娘に面倒をみてもらわなければ……」

「ふむ。そりゃあその通りだ。お前が先きに死ぬなんて、私を裏切ることだ。そんな事態が起ったら、私も、お前のあとを追って殉死するよ」

「殉死するような無茶な元気が貴方にあるのですか。」

第一、死んでいく私が迷惑だわ。何十年も貴方というお荷物を背負わされたあげく、死んでも同じお荷物を背負って、三途の川をわたるなんて、私、まっぴらですわ……。死ぬなら、順当に、貴方からお先にどうぞ……。出来るだけ面倒をみて上げますから……」

「一人ぼっちになったお前はどうするんだ……」

「身体がどうにかきく間は、女の年寄りって何かやっていくことがあるのですわ」

「身体がきかなくなったら——？」

「妹が二人もこの町にいるんですから、何とかしてくれ

るでしょう。……もし、二人の娘をよそに嫁づけるとしたらね……」

「ふーん」

良太郎は、間のびした返事をして、自分が手がけている庭の樹木や草花を眺めていた。六月半ばのこのごろ、花を咲かせている樹は、ねむ、きょうちくとう、さるすべりなど。花壇に咲いている花は、あさがお、百日草、カンナ、ダーリアなど。秋に実がなる柿、栗、梨、まるめろなどの果樹も、後のひろい畑のところどころに、青空を背景に、たしかデッサンで、それぞれの形に黒い枝を張っていた。

地境いの、低いヒバの垣根の外には、一またぎぐらいの幅の小川が流れており、手ですくって飲めるほどに水が澄んでいる。日光がさしこむと、浅い底の小石の群れが、水の動きで、キラキラ踊っているように見える。

その外には、青々とした水田が遠くひろがり、ときおり、白い埃をまき上げて、デコボコした村道を、トラックが通りすぎていく。左手に大川が流れ、その対岸は、一帯のリンゴ畑がつづいている。部落がところどころに散在し、その果てには、国境いの低い山並みが横たわっ

ている。そして、その山並みが低いせいで、空が果しもなくひろいものに見える。——そういうのが、柿崎家の裏庭と、そこから眺めた風景である。

良太郎はふと、ニヤツと口元をゆがめて、

「なあ、たまえ。私達はもう一つの場合を忘れていたよ。年の若いお前が、私をみすてて、先に極楽に行ってしまった場合、私は身のまわりの世話をしてくれる、年の若い小きれいな後妻を、もらうことにしたらどうだろう。世間に例のないことではない……」

「まっ！ もうそんな事を考えているのね。誰が先きに死んでやるもんですか。貴方は生涯に、女は、私一人を知っていればいいのよ。いまごろそんなことを云い出して……。だったら、私も昔、あのカツコいいぐれん隊みたいな男に欺されていた方がよかったかも知れないわ……」

「まあ、そこらでケンカはよそう。……婿を迎えるか、二人とも嫁にやっしてしまうか、私等の気持よりも、民子や加奈子の気持が問題だと思う……」

両親が座敷でそんな話をしているとき、民子と加奈子も、屋根裏にむりして作った、頭がつかえそうな、細長

い自分達の室で、同じ問題について話し合っていた。

民子は、裏庭やそれにつづく青い水田を見はらす窓ぎわにミシンを据えて、縫い物をしていた。加奈子は、畳に寝そべって、両の脛を折り曲げてブランブラン動かしながら、このあいだから読み出した、ロマン・ローランの「魅せられたる魂」を読みつづけていた。

二人の中間に、小判型の煎餅を盛り上げたガラスの菓子皿があり、ときどき、二人ともそれに手を伸ばしては、バリバリと煎餅をかじっていた。

赤くさびた釘の先きが、ところどころに見えたりしている低い屋根裏で、しょっちゅう身体が押えつけられているような気がするが、子供の時からこの室で暮して来た民子や加奈子にとっては、爪立ちすれば届きそうな、その屋根裏が、むしろなつかしいものに感じられるのだった。壁によせて、古びた小箆筒、洋服箆筒、鏡台などが置かれ、窓際には、ミシンのほかに、かなりの距離を保って、二人のテーブルと椅子が置かれ、形だけの狭い床の間には、大波が巨人のように押しかぶさって打ち寄せている北斎の浮世絵の額が飾られ、その下にはダークリッアを一輪さした素焼の花瓶が置かれてあった。——全体と